

留学報告書

～リアル政治学院～

2019年9月～2020年3月

国際関係学部国際言語文化学科4年

この報告書では、私が約7か月間の交換留学を通しての感想を授業面と生活面の二つの観点から述べます。

まず授業の面で印象的であったのは、プレゼンテーション形式を採用していたことです。もちろん講義形式の授業もありますが、私が履修していた授業の半分はプレゼンテーションを用いたものでした。プレゼンテーションは個人またはグループで作成し、クラスの前で発表、その後にクラス全体でテーマに沿って討論をするような形でした。県立大学の授業ではあまりクラスの前でプレゼンテーションをするという機会がなかったので、この留学を通してプレゼンテーションを経験できたことは大きな収穫になりました。プレゼンテーションをするための準備では、担当したテーマを分かりやすく伝えるために、仲間たちと何度も話し合いを重ね、内容を追求することができました。私は、ホームレス問題に対する公共政策、国際自由貿易の利点、EU拡大についてなどの内容に関するプレゼンテーションを担当しました。日本にいとあまり見かけることのなかったホームレスや物乞いをリールの街では度々見かけ、ホームレス問題を肌で感じることができ、フランスが直面するホームレス問題の深刻さを目の当たりにしました。プレゼンテーションの上で大切にしていたことは、政府の観点やホームレスの立場またはバックグラウンドなど多面的な視点から物事をとらえ、議論をするような形で結論を導き出すことです。留学生用のプログラムの授業を履修していたので様々な国籍の学生がおり、彼らと意見を交流することで新たな見方を発見することができました。プレゼンテーションは視聴する側も議論に参加することで意見を交わし合うことができ、講義形式よりも積極的な取り組みがなされると感じました。

次に、私はリール政治学院の授業以外に週に一度日本語を学びたいフランス人と交流するクラスに参加していました。そこでは、日本語とフランス語を交互に用いて会話をし、それに加えて難しい四字熟語や魚の名前などハイレベルな漢字も教えられていました。彼らの日本文化における知識は豊富で、感銘を受けました。時折、彼らの質問に応えられず、日本人として日本のことをあまり知らない自分に羞恥を覚えました。また、このクラスに出席していない他のフランス人や留学生も日本の文化、特に食文化や日本独自のアニメカルチャーなどに高い関心を示していました。私が思っていた以上に日本の文化が海外に受け入れられ、またその各地域に溶け込みながら独自の進化を遂げていると感じました。海外に出て新たな日本文化の顔を知ることができたのは貴重な体験であったと思います。

生活面において最も驚いたことは、フランス人の政治参加への積極性です。私が留学している間に、幾度となくストライキやデモに遭遇しました。12月5日から始まったマクロン政権が打ち出した年金改革に反対する大規模なデモやストライキには、リール政治学院の生徒や教員も度々参加していました。学生の中には、リール政治学院の入り口をゴミ箱や柵などで塞いで抗議をする人たちもいて、同じ世代の政治に対する熱量をこの目で確かめることができました。政策に反抗する姿勢として、ストライキをすることが正しい方法であるとは思いませんが、彼らが身体を張って自らの将来を守ろうとする姿勢は学ぶべきものであると感じました。また、留学期間中にリールの首長選挙があり、彼らの討論会に老若男女問わず多くの市民が参加しており、地方政治においても積極的に参加している姿を見ることができました。留学当初は、リール政治学院の学生だけが政治に対する意識が非常に高いと思っていました。しかし、他大学の学生や一般のフランス人の方と交流する機会の時にも政治の話をする事が多く、フランス人全体が政治に対して興味関心を強く持っていることを窺うことができました。彼らの政治的関心は国内だけにとどまらず、香港のデモやトランプ政権の話など多岐にわたっていました。このように政治的関心が高いことは日本の若者も見習うべきものであると思いました。



次に生活していて受けたカルチャーショックは国民性の違いでした。フランスでは、法律で労働時間が週 35 時間と定められており、スーパーやレストランなど大抵日曜日は閉まっています。コンビニエンスストアのように 24 時間営業をしているお店はほとんどありませんでした。日本で当たり前であると思っていたコンビニエンスストアなどのありがたみを感じると共に、日本人は少し働きすぎではないだろうかと思いました。リアルでの生活に必要な銀行の開設や住宅手当、社会保険の申し込みなどの様々な手続きは日本では考えられないほど長い時間がかかりました。銀行を開設するのに約 2 週間、住宅手当の申請には約 3 カ月かかりました。日本での手続きの速さが当たり前だと思っていた私にとって、フランスの手続きの遅さには驚きました。しかし、フランスの友人にこのことを相談してみると、この速さは通常のことであり驚くことではないと言っていました。これは、日本人とフランス人の国民性の違いであると思います。フランスにおける時の流れは日本に比べ非常にゆったりとしているような印象を受けました。また、リアルには多くの移民がおり、様々な人種、宗教の人たちがいます。街は多様性に溢れ、協調性や統一性を尊重する日本社会とはまた一風違った街の雰囲気がありました。このような国民性の違いは現地に住んで初めて肌で感じることができ、貴重な経験ができたと思います。

今回の交換留学を通して、様々な国の人たちと学校生活を共にし、彼らと意見交換をしながら勉学に励むことができたことはかけがえのない体験でした。日本にいた時では経験することのなかった異文化の世界を自分の目で見て、肌で感じられたことは非常に有意義なものとなりました。終わりに、今回の交換留学は新型コロナウイルスの影響で、強制帰国という形で終わることになってしまったことが心残りです。三月に入り、新型コロナウイルスの感染拡大がフランスで始まり、学校が閉鎖され、外出禁止令が出され日々状況が目まぐるしく変化する中で、私はこのまま残るべきなのか否か葛藤しました。県立大学からどのような行動をするべきなのかという連絡がギリギリになるまで来ず、他大学の学生が早めに手続きをする中で、私は不安で一杯でした。異例の事態であったので判断するのが困難であったことは十分承知ですが、もう少し早めの連絡を頂けたらありがたかったです。

国際関係学部国際言語文化学科 3年

フランス リール政治学院 Sciences Po Lille

留学報告書

2019-2020



最終留学報告書

国際関係学部 国際関係学科 3年

私は2019年9月から2020年4月まで約7か月間フランス、リールにあるリール政治学院に留学していました。住居は学生寮で1人部屋に住んでいました。フランスでの生活は日本での生活とは全く違い、楽しいこともあれば困難な時も多々ありましたが、常に刺激を受けて生活していました。このレポートを通して、フランスで学んだことや経験したことを振り返りたいと思います。

はじめに、学校生活について。私はCEP(Certificat d'Etudes Politiques)というコースを選択していました。このコースでは、英語の授業とフランス語の授業をほぼ同等の量を受けることになります。正直に言うと、フランス語の授業はあまりにレベルが高く、とても辛かったです。クラスメートの留学生は言語スキルも豊富で、同じ授業を受けるのは大変でしたが、皆の意識がとても高い為、常に刺激ややりがいを感じていました。レポートやテストも準備がとても大変でした。政治や経済に関する知識がほとんど無かった為、言語の壁は勿論ですが、テストのときは一から経済を勉強し直さなければいけませんでした。最初はあまりにハードな授業に弱音を吐いてばかりいましたが、テスト期間は必死にレポートとテスト勉強に時間を費やし、なんとか全ての教科の単位をとることができました。しかし、最終的に後期はCEPのフランス語の授業を途中でやめてしまった為、CEPのコースを完全にやりきることはできませんでした。(辛かったから辞めたのではなく、授業内容に満足できなかった為辞めることになりました。) 当時は必死でやっていた為つらいとしか思えませんでした。今考えると、人生で最もハードなタスクだったと思います。フランス語もそれほどできなかったのも、とにかく根性で何とかやり切りました。その中で支えだったのが日本人の友だちの存在でした。普通、留学生活では同じ国籍の子たちとはあまり話さないほうが良いのかもしれませんが、CEPのコースでは日本人同士の協力が本当に大切でした。また、辛かったことばかりを書いてしまいましたが、リール政治学院での学生生活は、普通に日本で勉強していたら絶対に経験できない刺激的なものだったと思います。普段では学べない政治や経済のこと、フランス語の専門用語、様々な国の政治事情など、自分の知識がますます増えた実感があります。

次に、フランスでの生活について。私が留学に行った期間は、波乱ばかりでした。第一に、無期限デモです。フランスでは頻繁にデモやストライキが起きますが、この時期は特に盛んで、しかもかなり長期のデモがフランス各地で発生しました。デモやストは私の生活にも影響を及ぼしました。交通機関が止まってしまうフランス国内の旅行に行けない、学院の前での生徒たちのストライキによって学校が閉鎖してしまうなど…。クリスマスの時期に行ったパリでは、メトロやバスが運休で、パリの中をひたすら徒歩で観光しなければなりません。

んでした。しかし、日本では滅多に起こらないこのような現象を見て、日本もフランスから学ぶべきものがあると思いました。国を変えたいのならば国民がその声を政府に届けなければ、国を困らせなければ国は変えられない、というフランス人の強い意志を感じました。政治に関して消極的な日本と、政治に関してアグレッシブなフランスにかなり違いを感じました。また、波乱の二つ目がコロナウイルスの流行です。結局私たちはこれを原因に留学を中止せざるを得なくなってしまいました。フランスにもっと長く居たい気持ちは山々でしたが、一日に何百人も亡くなっていく恐ろしさ、医療機関への信頼度の低さ、国境封鎖による移動の制限、それに伴う日本へ帰ることができなくなるかもしれないという不安、そしてアジア人差別がとてつ酷くなったことなど、多くの理由により、もうフランスに居ることは不可能だ、と思いました。日本に帰る直前は皆あまりの不安や閉塞感に、ひたすら泣くことしかできませんでした。今でも、帰国前に誰にも笑顔で別れを告げられなかったことが心残りです。しかし、このような経験はもう今期以降の留学ではできなかったかもしれない、と思うと、より一層自分はレアな経験をしたな、こんなにつらいことを経験すればもうなんでも乗り越えられるな、という気持ちにもなります。

最後に、ネガティブな文になってしまったので、楽しかったことを振り返ります。私がフランスに行って一番良かったなと感じた瞬間は、日本ではあまり触れ合うことのない、戦争の歴史に触れあうことが出来たことです。私はユダヤ史を主に勉強していますが、日本ではまだまだポピュラーな分野ではないかと思います。しかし、フランスをはじめとする欧州諸国では、いたるところに軍事博物館や収容所があります。私はポーランド、ベルギー、ラトビア、イギリスなどの軍事博物館でホロコーストについての展示を見ましたが、どれも日本では知ることのできなかつたことだと感じています。そして同時に、日本でももっとこういうことを知る機会があればいいのにと感じました。政治学院での授業は正直歴史などは全く無かつたため、自分の勉強したい分野の授業を受けられないことにもどかしさを感じていましたが、こうした旅行の中での経験にはとても満足しています。

フランスに留学してよかったと思う点は、とにかく日本とは全く違うということです。国民性や政治、環境などすべてにおいて自分の固定観念を打ち壊されるような感覚でした。私は留学を通して広い価値観やパースペクティブを得ることがこの留学の目的だったので、結果フランスに行って良かったと感じています。そしてこの留学で学んだことを日本の生活で生かして、さらに学びを得たいと思っています。以上が留学報告書です。